

恩寵を得るには心の準備が必要だとしていることから、『世の空しさ』、『ノアの道徳的箱舟』、『ノアの神秘的箱舟』などにもとづいて、観想への準備を論述、最後に『靈魂に与えられた結納金についての独白』にある神秘的体験の記述を引用して終る。リチャードの項では、いうまでもなく『小ベンヤミン』と『大ベンヤミン』についての解説が重要な部分をしめる。とくに『大ベンヤミン』における観想の六段階を説明したのち、『烈しき愛の四段階』を取上げながら、このリチャードの「キリストの十字架の神秘主義」を近代的神秘主義の一つの先駆として評価している。

以上、順序にしたがって、ただその骨組だけを紹介したにすぎないが、原典に即した研究の成果である本書が、西洋の神秘主義を研究しようとするものにとって、示唆にとんだ有益な労作であることは諒解いただけるであろう。著者が序言でも述べておられるように、さらに十三世紀以降がまとめられることを期待したい。

## 最近のポルフュリオス研究の動向

—Heinrich Dörrie, *Porphyrios' „Symmikta Zetemata“*

(*Zetemata*, Heft 20, 1959)をめぐって—

野 町 啓

近年、《*Entretiens sur l'antiquité classique*》の一冊として (Tome, VII), 本稿において検討しようとする W. Theiler, H. Dörrie 等の寄稿から成る《*Porphyre*》(1965) や、P. Hadot の大冊《*Porphyre et Victorinus*》の刊行など、ポルフュリオスに対する関心と彼を評価しようとする動向がみられる。直接には散逸したポルフュリオスの《*Σύμμικτα ζήτηματα*》の再構成を意図する Dörrie の本

書も、このような動向の一環とみなすことができよう。そして、その際ホルフェリオスは、一つには、いわゆる新プラトン主義の系譜と展開の過程において彼の占める位置、ならびにキリスト教神学との関係、ことにアウグスティヌスに及ぼした影響という二面から関心を惹き、重視されているように考えられる。さらに前者の場合、後にふれる Theiler と Dörrie との間にみられる見解の微妙な差異からもうかがえるように、その過程における彼の意義を評価する点では軌を一にする人々の間でも、彼の思想的独自性の有無、ならびにその所以、ことにアムモニオス、もしくはプロティノスのいずれと彼の思想を関連づけるべきかをめぐって、意見が二分しているように思われる。

彼を評価しようとするこのような動向を触発した一つの契機は、Theiler が 1933年 *《Porphyrios u. Augustin》* において提起した次のような作業仮説に求められうるように考えられる (cf. *Schriften d. königsberger Gelehrten Gesellschaft, Geistesw. Kl., 10, 1933, SS. 4 ~ 5* = in *Forschungen zum Neuplatonismus, S. 164*)。すなわち Theiler は、そこにおいて、アウグスティヌスにみられる新プラトン主義に属する思想家達の教説と思われるもので、Inhalt, Form, Zusammenhang 上それと対応するものがプロティノスにないものは、ホルフェリオスに遡及されうと考える。そして、アウグスティヌスにみられる *〈Alles Philosophische〉* を *〈porphyrisch〉* とみなす大胆な結論を彼は出している。Theiler のこの見解に対しては、周知のように、たとえば Courcelle にみられるような、*〈textual association〉* ではなく、*〈doctrinal connection〉* を重視するものとする批判等さまじまな論を呼んでおり、アウグスティヌスに対し影響を及ぼした新プラトン主義なるものの実体が、プロティノスその人によるものなのか (Henry の見解を想起せよ)、あるいはそれ以降のものなのかという問題は、今後さらに論議がつみ重ねられていくものと考えられる (cf. Courcelle, P., *Les Lettres Grecques en Occident, Engl. transl. Late Latin Writers and their Greek Sources, p. 172*)。この問題は、ひいては、紀元後 4 ~ 5 世紀におけるキリスト教と新プラトン主義との関連を解明するための重要なメルクマールを提示するものでもあり、また、先にふれたホルフェリオスへと関心を向けられている二面が、それぞれ決して別箇のものではなく、いわば表裏一体の関係をなすものであって、有機的な関連においてとらえられるべきことを示唆

しているともいえる。そしてDörrieのこの研究は、この問題に対し、新しい局面と資料を提示したものとみることができる。

Dörrieは、ポルフェリオスの《*Σύμμικτα ζητήματα*》が、(I)靈魂の本質、(II)靈魂と肉体との一体化—これに対し、ポルフェリオスは〈*ένωσις*〉という術語を充当したとDörrieはみる—、(III)靈魂は部分を持つか否か、という三つの主題、*ζητήματα*から構成されていたものと推定する。(I)と(III)とは、結局同一線上の問題だといってよく、Dörrieは、後のプロクロスにみられるような (*In Tim.*, II, 103, 29 D.), 靈魂について、その〈*οὐσία*〉, ならびにそれと肉体との〈*κοινωνία*〉という二つの問題の区別と設定形式はポルフェリオスにより定式化されたものであり、彼に由来するものと考えている (S. 14—以下単なるページ数は、Dörrieの本書のそれを示す—)。そして、ポルフェリオスがこれら二つの問題のうちとりわけ関心を持っていたのは、*《Vita Plotini》* (13, 11) にみられる、彼が師のプロティノスと、三日間にわたって、靈魂と肉体とがどのようにして一体化するのかをめぐって議論したという記事からもうかがえるように、第二の問題であり、ひいてはそこに《*Σύμμικτα ζητήματα*》の中心があったとDörrieはみるのである。さらにDörrieは、ポルフェリオスがとりわけこの問題に重点をおいた理由を、彼の靈魂観がプラトニズムの流れの中で占める次のような独自性に求めている。Dörrieによれば、ポルフェリオスは、同書の中で、靈魂について、要約すれば、(1) *ἀσυγγύτως ἡνωμένη*, (2) *ἀσώματος*, (3) *οὐσία νοητή*, (4) *καθ' ἑαυτὴν γίνεσθαι* という四つの規定を試みていたことになる (S.166)。これら四点のうち(2)~(4)は、クセノクラテス (Fr. 64 H) 以降の伝統的な靈魂観に依拠したものであり、その継承であって、とりたててめあたらしいものではない。これに対し(1)の観点は、既存の靈魂観の革新にもとづく新しい視点であり、そこに靈魂観におけるポルフェリオスの独自性があるとDörrieはみるのである。具体的にいえば、アカデメイアに伝統的な靈魂観は、プラトン、ことにその《*ティマイオス*》(30 B, cf. 36 E) にみられるような観点をもとにして、靈魂を英知界と現象界とのいわば〈*das verbindende Mittel*〉とみ、それに両者を媒介する機能を帰属させようとする。これに対し、このような観点を *aufheben* し、靈魂の〈*Transzendenz*〉を強調したのは、プロティノス、ひいてはポルフェリオスであったとDörrieはみる (SS. 12. 167~225)。このような更新が提起されてくる

背後に、τὸ εἰ-νοῦς—ψυχήといういわゆる新プラトン主義に固有の存在の階層分化と、これら三つの原理的なものの成す一種のディアレクティックのあることはいうまでもないが、Dörrieは、ことにポルフェリオスにおいてはじめて、靈魂がその超越性を保持したまま、それと全く異質なものとしての肉体といかに一体化するか、哲学的論証がこころみられたと主張する。むろん靈魂と肉体との一体化の問題は、プロティノスにおいても、また《Gnosis》や《Hermes Trismegistos》等の諸文書においても論及されてはいる。しかしそこにおいては、主として、靈魂の肉体への降下といったことに関心が向けられている。これに対しポルフェリオスの場合、従来たとえバストアにみられるような物体相互間の一体化について用いられた説明方式を、靈魂と肉体という全く異質なものの間の一体化に適用し、〈ἀσύγχετος ἔνωσις〉という発想が展開されており、Dörrieはそこにポルフェリオスのこの問題に対する独自性をみようとする（なお、この点に関してはHadot [*Porphyre et Victorinus*, Tome I, PP.485~7]の〈Le transposition platonicienne du stoïcisme〉というポルフェリオスに対する特徴づけ参照）。そしてDörrieは、〈ἔνωσις〉に関するポルフェリオスの教説が、ネメシオスの《Περὶ φύσεως ἀνθρώπου》第三章に伝存されているとみており、Dörrieの本書の前半は、ネメシオスの同書第三章(125~136 *Matthaei*—ちなみにこの部分はTheilerのFr. IIに相当する cf. *Ammonios d. Lehrer Origenes*, in *Forschungen zum Neuplatonismus* S.35—)のテキストとコメンタリー(SS. 37~99), ならびにそれをめぐる諸問題の検討により占められている。ネメシオスの同書第三章が、後にもふれる彼独自の問題意識からするポルフェリオスの当該書第二巻の *Bearbeitung* から構成されていること自体の指摘は、彼のこの本とプリスキアーヌスの《*Solutiones ad Chosroem*》50, 25~52, 22 *Bywater* (CAG suppl., I, 2) との内容上の類似・対応から、すでにH.V.Arnimの古典的業績(*Quelle d. Überlieferung über Ammonios Sakkas*, *Rhein. Mus.*, 42 [1887] SS.276~285)によってなされており、Dörrieもその驥尾に付し、やはりプリスキアーヌスをその例証としてあげている。ただし、Dörrieの場合、さらにこれとあわせて、ネメシオスの同書に紹介されている靈魂観と、《*Sententiae*》(‘*Ἀφορμαὶ πρὸς τὰ νοητά*’) や《*Ad Marcellam*》にみられるポルフェリオスの所説との一致が、ネメシオスの典拠がポルフェリオスに遡及されうることの

有力な例証としてあげられており (cf. SS. 95~98), この点が、次にみられるように、アムモニオス、ひいてはプロティノスとポルフュリオスとの関係をめぐる、Dörrie と Theiler 間の見解の相違が生じてくる所以ともなってくるように思われるのである。

ネメシオスの同書からは、Dörrie にしたがえば、靈魂は、その〈ἀσώματος〉という特質ゆえに肉体のすみずみにまでいきわたり、しかもそれと〈ἀσύγχυτος〉に一体化しうる、という独自の見解をポルフュリオスが展開したと考えられる。しかしこの〈ἀσύγχυτος ἔνωσις〉という発想は、ネメシオスの同書129, 9 (M.) においては、その創始者としてプロティノスの師アムモニオス (Ἀμμώνιος ὁ ὀδιδάσκαλος Πλωτίνου) の名があげられており、以下、アムモニオスの教説の紹介という形で〈ἔνωσις〉に関する議論が展開されている。したがって、もしこの記述を文字通りにとるならば、〈ἀσύγχυτος ἔνωσις〉という発想は別にポルフュリオスの独自の見解ではなく、アムモニオスの所説を継承したものであり、また、謎につつまれている (cf. *Vit. Plot.*, 3, 25) アムモニオスの思想再構成上の有力な手がかりをこの箇所は提供するものだといってよい。事実 Theiler は、後にみるように、このような観点をとろうとしている。これに対し Dörrie は、ネメシオスの同書139~140, 5 (M.) 一ちなみにこの部分はポルフュリオスの当該書の書名があげられ、それからの逐語的引用から構成されている。cf. 133, 2~5 M.—にみられる〈συμπλήρωσις〉の教説を有力な例証として、この発想をあく返もポルフュリオスに帰そうとする。すなわち Dörrie によれば、靈魂は肉体に対するいわば〈συμπλήρωσις〉としてそれと一体化するのであり、ポルフュリオスにおいては〈ἔνωσις〉とは〈συμπλήρωσις〉の謂にほかならない。この〈συμπλήρωσις〉という発想自体はプロティノスにもみられるものであるが (S. 70; cf. Wolfson, H. A., *The Philosophy of The Church Fathers*, vol I, p. 467; Norris, R. A., *Manhood and Christ*, pp. 73 sqq.), ポルフュリオスはこれを靈魂と肉体との一体化に適用したのであり、たとえ〈ἔνωσις〉がすでにアムモニオスにより提起されたものであるにせよ、ポルフュリオスはさらにそれを〈συμπλήρωσις〉により基礎づけたとみるべきであって、そこに Dörrie は彼の意義をみようとするのである。Dörrie のこのような観点は、アムモニオス—プロティノス—ポルフュリオスをいわば発展的連続性の関係においてとらえようと

するものだといってよい。さらにDörrieは、ポルフェリオスの直接の手本を、アムモニオスよりもむしろプロティノス、ことにその《エンネアデス》IV, 3に求めようとする(SS. 15.87 sqq.)。そして、《エンネアデス》IV, 3, ならびにIV, 4が、先にふれた《Vita Plotini》(13, 11) にみられる論議の後に、またそれを素材として成立したとする仮説すら主張しているのである(S. 18, Anm. 1)。

しかし、以上の点をめぐる Theiler の見解は、Dörrie のそれとは異なる。《Ammonios d. Lehrer d. Origenus》(in *Forschungen zum Neuplatonismus*—以下F. N.と略記—)において彼は、ネメシオス、ことにその129, 9(M.)にみられる所説の直接の典拠をアムモニオスに遡及させようとする。彼のこのような主張の核心は、ポルフェリオスをプロティノスよりもアムモニオスに直接関連づけ、ポルフェリオスにアムモニオスの思想の痕跡が存在した反映されているとみようとすることにある。そしてその前提として、彼は、テオドトスによるアムモニオスの〈σχολαί〉の存在という仮説を提示する(F. N., SS. 37sqq.)。彼は、その存在を例証する資料として、先のプリスキアースの《Solutioes ad Chosroem》(42, 15 B.)にみられる〈aestimatus est autem et Theodotus nobis opportunas occasiones largiri ex collectione Ammonii scholarum et Porphyrius ex commixtis quaestionibus.〉という記事をあげている。そして彼は、プリスキアースとネメシオスの Zusammenstellung からアムモニオスの Identifikationを行ない、ポルフェリオスへのアムモニオスの〈σχολαί〉の伝承とその利用を主張しているのである。彼の立場は、ポルフェリオスの意義と思想的独自性を認めている点では先のDörrieと共通してはいる。しかし彼のポルフェリオス評価の理由は、一つにはアムモニオスとポルフェリオスとの関係にあり、またそこからする前者の再構成にその意図があるように思われる。彼によれば、ポルフェリオスは、プロティノスがアムモニオスから離反している度合と同程度においてアムモニオスに接近している。具体的にいえば、アムモニオスとプロティノスとでは、プラトンならびにアリストテレスに対する態度において次のような相違がある、と彼はみる。すなわち、前者がプラトンとアリストテレスとの統一性と調和の可能性を主張し、ガイオス学派と同じくアリストテレスのカテゴリー論を承認しているのに対し、後者の場合、アリストテレスの影響をむろん受けなかったわけでは決してないが、プラトンとアリスト

テレスとは明確に区別されており、またアリストテレスのカテゴリー論は否定されている。このようにみた場合、ポルフェリオスの思想的立場は、アリストテレスのカテゴリー論の重視、ならびに〈*Περὶ τοῦ μίαν εἶναι τὴν Πλάτωνος καὶ Ἀριστοτέλους ἀφ᾽ ἑαυτοῦ*〉という著作からも、アムモニオスに近いといえるのである (F. N., S. 40; cf. *Ammonios u. Porphyrios in Entretiens*, Tome XII, SS. 104sqq.). 彼は、さらに、このような自説を裏づけるものとして、オリゲネスの〈*De principiis*〉や、ヒエロクレスの〈*In aureum carmen*〉(ed. Mullach) にアムモニオスの影響と痕跡の存在を主張し、これらのテキストの比較考証を試みている。しかしこの観点は、いわゆる *Origenes d. Christ* と *Origenes d. Neuplatoniker* との関係はどうみるか、また先のネメシオスの 129,9(M.) を字義通りアムモニオスのものとして信憑性をおくべきかという問題と密接な関係を持ち、Dörrie とは少なくともこの点に関して著しい対照をなすものといえる。なぜならば、Dörrie は、すでに本書の出版以前 F. Heinemann (*Ammonios Sakkas u. d. Neuplatonismus* [*Hermes*, 61, 1926]) に対する反論のために書かれた別の論文 (*Ammonios d. Lehrer Plotinos* [*Hermes*, 83, 1955. SS. 463sqq.]) において、ネメシオス 129,9(M.) をアムモニオスの断片としてみることを否定しているからである (彼の *Origenes d. Christ* と *Origenes d. [Neu-] Platoniker* に対する見解については、筆者による彼の *Die platonische Theologie d. Kelsos in ihrer Auseinandersetzung mit d. christlichen Theologie* に対する書評—『西洋古典学研究』XX号所収—参照)。

さらにここで生じてくるいま一つの問題に、ポルフェリオスとアウグスティヌスとの関係をいかにみるべきかがある。Theiler は、この論文において、より詳細な検討を要するとしながらも、ポルフェリオスとアウグスティヌスとを関連づけ、さらに前者とアムモニオスとの関係からアウグスティヌスとオリゲネスとの関係を明確化する可能性を示唆している (F. N., S. 40, Anm. 74)。これは、先にふれた彼の作業仮説の延長線上の主張といえよう。Dörrie においても、たとえばポルフェリオスとその第一 *Zήτημα* において靈魂の不死の論証を行なったと推定し、その内容がアウグスティヌスに伝存されていると考え、その一部の複元を試みている (S. 9. 153)。またアウグスティヌスとの関連においてしばしば問題となる 〈*De regressu animae*〉 とこの 〈*Σύμμικτα ζήτήματα*〉 との

関係についても彼は言及しているが (S. 164), 断片的な叙述にとどまっており、この点は今後検討を要する問題だといえよう。以上ふれた Theiler と Dörrie との間にみられるこのような見解の差異は、また、本稿の始めの部分においてふれたポルフェリオスに関心が向けられる二面性をそれぞれ反映しているものともいえるが、かつてはたとえば W. Jaeger の *《Nemesios v. Emesa》* (1914) に典型的にみられるように、どちらかといえば散逸したポセイドニオスの *《ティマイオス註解》* の再構成という意図 (cf. Jaeger, op. cit. SS. 76~96) から注目された (それは同時にそこに新プラトン主義の起源を求めようとする動向とも相即する) ネメシオスが、ポルフェリオスとの関連において再評価されてきていることは、新プラトン主義の起源の問題に対する研究史の変遷としても興味深いものがある。ただキリスト教との関連についてみるならば、筆者の関心にとって、*〈ἀσύγχυτος ἔνωσις〉* という発想のキリスト教神学に対する影響に一層の興味が惹かれる。なぜならば、ネメシオスが肉体と靈魂の関係をめぐるポルフェリオスのこの所説を紹介している意図は、当該書 137~188 (M.) にみられるように、それをキリストにおける神性と人性との一体化に適用することにあるからである。キリストにおける神性と人性との一体化と、人間における靈魂と肉体との一体化との両者をパラレルにおいてみようとする事自体は、広く 3~4 世紀の教父にみられるものであり (cf. Wolfson, op. cit., I, p. 368), 別に、ネオシオスの独創によるものではない。しかし彼の同書 137, 10 (M.) にみられる *〈ἀμικτος〉・〈ἀσύγχυτος〉・〈ἀδιάφθορος〉・〈ἀμετάβλητος〉* は 451 年のカルケドンの信仰箇条にみられる *〈ἀσυγχύτως〉・〈ἀτρέπτως〉・〈ἀδιαρέτως〉・〈ἀχωρίστως〉* を先取しているものといつてよく (cf. Domanski. B., *Die Psychologie d. Nemesios* [in *Beitr. zur Gesch. d. Philosophie d. Mittelalters*, III, 1] SS. 68 sqq., Fortin, E. L., *Christianisme et culture philosophique au cinquième siècle*, p. 123, n. 4), キリストロジーの展開において注目すべき意義を持つように思われる。またこれとあわせて、同書 137, 4 (M.) 以降、*〈ἀσύγχυτος ἔνωσις〉* という発想をキリストロジーに適用し、エウノミウス派を論駁するにあたって、彼がポルフェリオスの立場を全面的に認めているわけではないことにも注目する必要がある (SS. 99 sqq.)。彼は、超越的實在が *〈ἀσυγχύτως〉* に *〈ἐνούσθαι〉* するという点ではポルフェリオスの見解を承認し継承してはいるが、しかしそ



の場合、ポルフェリオスにおける〈ψυχή〉をそのまま〈Θεὸς Λόγος〉と等置してはいない。むしろそこでは、134～135 (M.) にみられる〈ψυχή〉を〈ἀπάθεια〉であるとするポルフェリオスの靈魂観は否定され、〈ψυχή〉と〈Θεὸς Λόγος〉とは明確に区別されている。さらに、靈魂と肉体との〈ένωσις〉は、いわば〈ἡ φύσις ἀπείρα〉によるものであり、これに対しキリストにおける神性と人性との〈ένωσις〉は神の〈εὐδοκία〉によるものであるとされ、両者の区別と後者の場合における神の意志的契機が強調されているのである (cf. 144, 2 M.)。彼のこのような観点は、キリスト教によるギリシア哲学にみられる諸発想の受用と援用とが、決して一方的な摂取の関係ではなく、彼我の異質性の自覚に立脚し、むしろギリシア哲学との断絶点を積極的に利用し、再解釈していった過程であることを示唆し、またそのような態度の一つの具体的な現われとしてみることができる。Dörrieの本書も、単に新プラトン主義の起源・系譜の問題にとどまらず、それとキリスト教との古代末期における関係を解明する資料として、今後おおいに活用すべきように考えられるのである。

Hans Dehnhard: Das Problem der Abhängigkeit des Basilius von Plotin. Quellenuntersuchungen zu seinen Schriften De Spiritu Sancto. (Patristische Texte und Studien, 3) De Gruyter, Berlin, 1964, vii + 100.

山 村 敬

Dehnhardのこの書は博士論文であるが、二つの土台をもっている。H. Dörries, De Spiritu Sancto, Der Beitrag des Basilius zum Abschluß der trinitarischen Dogmas, Göttingen, 1956 と、それに対する Jaeger の書評 (Theologische Literaturzeitung, 1958 Nr. 4) である。大きな問題なので、